

## ノーベル賞の国際政治学

—ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1965年の秘密工作とその帰結—

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize:  
The Nobel Peace Prize and Japan: Covert Actions in 1965  
and the Result over Nomination of Former Prime Minister  
Shigeru Yoshida to a Candidate for the Nobel Peace Prize**

Nobuhiko YOSHITAKE

### 要 旨

吉田茂元首相が1965年のノーベル平和賞に推薦されていたことを示す史料が日本外務省外交史料館で2014年に発見された。2015年には、同史料館は1965年から1967年まで吉田元首相を推薦する工作活動を外務省が活発に展開していたことを示す史料を開示した。これにより、吉田をめぐる工作活動の全体像がほぼ明らかになった。

工作活動は、在ノルウェー日本大使であった勝野康助、須山達夫がノルウェー・ノーベル委員会委員長、委員と頻りに会見し、支持を求めて情報収集をただけでなく、日本外務省の指示によりアメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデン、マレーシア、ブラジルなどでも日本大使が各国の有力政治家、学者に働きかけ、吉田支持の推薦状をノーベル委員会に提出させる活動を行っていた。これが1965年、66年、67年の3年間続いた。

しかし、日本側の期待に反して、結局吉田がノーベル平和賞をもらうことはなかった。同賞受賞者は、1965年分はUNICEF（国連児童基金）、1966年分は保留の後、翌年に該当者なし、1967年分も保留の後、翌年に該当者なしという結果になった。

本稿では、1965年の吉田推薦をめぐる工作活動とその帰結を日本外務省およびノルウェー・ノーベル委員会の史料に基づき考察した。特に、日本外務省がいかなる工作活動を展開したのか、またノーベル委員会の評価がいかなるものであったのかを明らかにした。

キーワード：ノーベル平和賞、ノーベル委員会、吉田茂、日本外務省、在ノルウェー日本大使

## Summary

Historical materials indicating nomination of former Prime Minister Shigeru Yoshida in 1965 for the Nobel Peace Prize was found in 2014 in the Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA). The Diplomatic Archives disclosed in 2015 also another historical materials showing that the MOFA ran a covert campaign actively during the period between 1965 and 1967 for his nomination. These materials helped to reveal a full picture of the covert actions for Yoshida's nomination.

In addition to the efforts of Yasusuke Katsuno and Tatsuo Suyama, Japanese ambassadors in Norway at the time to have frequent talks with the chairperson and members of the Norwegian Nobel Committee for their supports for Yoshida's nomination and collection of information, the MOFA instructed Japanese ambassadors in the United States, the United Kingdom, Germany, Sweden, Malaysia and Brazil to lobby influential politicians and scholars of each country for submission of the recommendation letter for Yoshida's nomination to the Nobel Committee. This covert campaign continued for three years since 1965 to 1967.

Eventually, however, contrary of Japan's expectation, former Prime Minister Yoshida did not receive the Nobel Peace Prize. While the Nobel Peace Prize was awarded to United Nations Children's Fund (UNICEF) in 1965, both prizes in 1966 and 1967 were on hold for one year and not awarded to anybody respectively.

This paper discussed the covert actions for Yoshida's nomination in 1965 and the results based on documents of the MOFA and the Norwegian Nobel Committee. The paper particularly unfolded the covert campaign which the MOFA ran and the evaluations which the Norwegian Nobel Committee made.

Keywords: Nobel Peace Prize, Nobel Committee, Shigeru Yoshida, Ministry of Foreign Affairs of Japan, Ambassador of Japan in Norway

はじめに

- 1 吉田茂推薦をめぐる先行研究
  - (1) 吉田茂推薦をめぐるこれまでの言説
  - (2) 2014年9月報道の史料
  - (3) 2015年2月開示の外務省史料
- 2 1965年の吉田茂推薦をめぐる工作活動
  - (1) 推薦の経緯

- (2) 諸外国からの推薦支持の取り付け
  - (3) ノーベル委員会への働きかけ
- 3 1965年のノーベル委員会の評価と日本の対応
- (1) ノーベル委員会の評価
  - (2) 選考結果発表後の日本外務省の動き
- おわりに

## はじめに

吉田茂元首相（1878～1967年）がノーベル平和賞に推薦されていたことは、関係者の証言などから1970年代にはすでに知られていた。しかし、それを具体的に裏付ける証拠はなく、その詳細は不明であった。そうした中、2014年9月、吉田の推薦が确实視される史料が外務省外交史料館で見つかり、共同通信社より各紙に配信された<sup>1)</sup>。それは、1965年に吉田をノーベル平和賞に推薦したと考えられる推薦状と関連文書であった。筆者は吉田の推薦をめぐるこれまでの言説を整理した上で、同史料の内容と位置づけを早速分析し、紹介を行なった<sup>2)</sup>。しかし、同史料は推薦のために作成されたであろう推薦状案のみであり、それが実際にいかなる経緯で誰によって作成され、ノルウェー・ノーベル委員会に送付されたのか、また、その後、その推薦をめぐる外務省がいかに対応したのかなど、詳細は全く不明であり、それを裏付ける史料も皆無であった。

2015年2月、筆者の開示請求により外務省外交史料館はそれを裏付ける新たな史料を開示した。この史料は、主に1960年代に外務省で使われたと考えられるノーベル賞関連ファイルの中にあつた。そのファイルの大半はすでに公開されていた。上記の2014年9月に報道された史料も、同ファイルのすでに公開された部分に紛れていたものであつた。筆者は、そのファイルに非開示部分があることに気づき、長年、注目してきたが、ようやくその非開示部分が公開された。それは、吉田の推薦をめぐる詳細を記した史料群であつた<sup>3)</sup>。情報源の個人名など、現在でも慎重な配慮が必要な部分があつたため、審査に時間を要したと考えられる。開示された史料でも多くの個人名が黒塗りとされている。しかし、吉田推薦をめぐる日本側の秘密工作の全体像がほぼわかるものであつた。

2015年には、ノルウェー・ノーベル委員会は1965年の選考に関する史料を公開し、1965年のノーベル平和賞推薦状況と選考過程の一端が判明した。すなわち、同年にいかなる候補が推薦されていたのか、吉田は誰から推薦を受けていたのか、吉田に対するノーベル委員会の評価はいかなるものであつたのかについて詳細が明らかになつた。

本稿では、これまで明らかになつてきた事実関係と新たに開示された日本、ノルウェーの史料とを照らし合わせ、特に1965年の吉田推薦をめぐる秘密工作の実態とその帰結を考察する。ま

ず第1章で、これまでの研究で判明している事実関係と史料の状況について整理する。第2章では、1965年の吉田推薦をめぐる日本側の秘密工作を（1）推薦の経緯、（2）諸外国からの推薦支持の取り付け、（3）ノーベル委員会への働きかけの3点に分けて整理する。その際、先行研究における言説、史料とも比較検討し、実際の工作活動がいかなるものであったのかを明らかにする。第3章では、1965年のノーベル平和賞推薦状況を概観した上で、ノーベル委員会の吉田評価について検討するとともに、吉田の受賞に失敗した後の日本側の動きをまとめる。特に、ノーベル委員会の選考結果発表を受けて、日本外務省がいかに1965年の工作活動を総括し、その後いかに対応したかも紹介する。

## 1 吉田茂推薦をめぐる先行研究

### （1）吉田茂推薦をめぐるこれまでの言説

吉田がノーベル平和賞に推薦されていたことは、関係者の証言から1970年代以来知られていた。特に、1974年に佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞した際に、そのための受賞工作进行を担当した元外交官の加瀬俊一、加瀬に指示を与え、全面的な資金提供をした鹿島守之助鹿島建設会長、さらに平和賞を受賞した佐藤自身からも、吉田の推薦活動があったことが示唆されていたのである<sup>4)</sup>。それらを総合すれば、吉田は、亡くなった1967年とそれに遡る2年の計3回、ノーベル平和賞に推薦されたとされる。

また、吉田の推薦活動と同時代に、すでに報道もなされていた。1966年に2回目の推薦がなされた直後、『東京新聞』と『読売新聞』が推薦の事実、推薦者の氏名を詳細に伝えている<sup>5)</sup>。すなわち、推薦したのは、小泉信三（学士院会員）、横田喜三郎（最高裁判所長官）、田中耕太郎（国際司法裁判所判事）、栗山茂（国際法協会会長）、高柳賢三（東京大学名誉教授、元憲法調査会会長）、江川英文（東京大学名誉教授）の6名であった。なお、これらの記事は、吉田を1960年の賀川豊彦に続く日本人「二度目」、「二人目」のノーベル平和賞候補と述べ、実際とは異なる紹介をしていた<sup>6)</sup>。1965年の吉田推薦についても触れていない。

その後、1991年に吉田のノーベル平和賞推薦について、その経緯が関係者によって明らかにされた。財団法人吉田茂記念事業財団が吉田の近親者、親しく接した関係者の回想をまとめた『人間 吉田茂』の中で、1963年から67年まで吉田の世話係となり、外務省とのパイプ役を務めた御巫清尚<sup>みかなぎきよひさ</sup>が、晩年の吉田茂の様子を回想し、吉田のノーベル平和賞推薦運動も明らかにしたのである<sup>7)</sup>。それによれば、1965年、1966年、1967年の3回の推薦が行なわれたとされ、その活動内容も極めて詳細に紹介されていた。吉田の推薦を考える土台ともなる証言であるため、その重要部分の要約を以前の拙稿から註を含めて再録しておきたい<sup>8)</sup>。

① 1965年

1965年に吉田の周辺や外務省幹部の間で吉田のノーベル平和賞推薦の働きかけが始まり、「三月始めに」<sup>9)</sup> 内海丁三<sup>10)</sup> に推薦文の起草を依頼したが、結局、同年のノーベル平和賞はUNICEF（国連児童基金）に決まった。

② 1966年

1966年は、「より力を入れて運動を進めることが関係者の間で確認され」、同年1月17日に下田武三外務次官が田中耕太郎、横田喜三郎、高柳賢三、江川英文、栗山茂の推薦有資格者を招いて運動の進め方を協議した。推薦状は、この年も内海丁三に依頼された。さらにこの年は、『マンチェスター・ガーディアン』紙の駐日特派員、ティルトマン（Hubert Hessel Tiltman）の助言により、吉田の活動についての論文が用意された。まず論文の草稿を高坂正堯京都大学助教授が作成し<sup>11)</sup>、吉田の了承を得て、外務省の赤谷源一が英訳、さらにティルトマンが校閲した。同年8月に原稿がブリタニカ社に引き渡され、これが吉田執筆の論文として1967年版『ブリタニカ年鑑』の巻頭を飾ることになった<sup>12)</sup>。ただし、これについて御巫は「ノーベル委員会にはどれほど効果があったか分からない」と述べている。その他、ノルウェーに赴任する新大使<sup>13)</sup> に尽力を依頼したり、三谷隆信前侍従長にノルウェーに立ち寄って運動をしてもらっている。しかし、「この年も受賞に至らず関係者一同を落胆させた」のであった。

③ 1967年

1967年も前年と同じ手順で1月に次官が推薦有資格者を集めて協議し、推薦文を書いてもらった。7月頃になって取りまとめ役の栗山茂が次官に対し、「今年を最後と思って努力しようとしたが、十月吉田氏が逝去して本当に最後となってしまった」とある。

以上、以前の拙稿から御巫証言の概要を紹介したが、吉田の推薦活動について、ここまで詳細に活動が明らかにされたのは初めてのことであった。活動の担い手になった外務省関係者の氏名、具体的日付、運動の実態も判明したのである。この証言によれば、外務省の事務次官がまとめ役を務めたと考えられる<sup>14)</sup>。しかし、その根拠が示されているわけではなく、確証は得られないままであった。

御巫の証言は、その後の吉田茂研究においてノーベル平和賞関連では重要証言として利用されている。たとえば、ノンフィクション作家の保阪正康は、御巫の証言を引用し、ノーベル平和賞への吉田の推薦を批判的に検証している<sup>15)</sup>。

## (2) 2014年9月報道の史料

以上の状況下で、1960年代の吉田のノーベル平和賞推薦について具体的な証拠を提示したが、前述の2014年9月の報道であった。それは、外務省外交史料館のファイルに所蔵されてい

た1965年ノーベル平和賞推薦状の発見を伝えるものであった。

筆者は記事の基になった外務省外交史料館の推薦状を分析し、紹介した。吉田の推薦に関する史料は、ファイルの中に6点あった<sup>16)</sup>。

- ① 1965年1月26日付け推薦状（英文、タイプ打ち3頁）<sup>17)</sup>。
- ② 経歴書（英文、タイプ打ち1頁）<sup>18)</sup>。
- ③ 推薦理由書（英文、タイプ打ち2頁）<sup>19)</sup>。
- ④ 1964年12月10日のノーベル平和賞授賞式におけるヤーン（Gunnar Jahn）ノーベル委員会委員長によるキング（Martin Luther King, Jr.）牧師への授与演説（英文、タイプ打ち6頁）<sup>20)</sup>。
- ⑤ サンフランシスコ講和会議議事録における1951年9月7日の吉田演説の抜き刷り（英文、タイプ打ち7頁）<sup>21)</sup>。
- ⑥ 吉田の政治活動についての評伝（英文、タイプ打ち24頁）<sup>22)</sup>。

以上の史料の発見当時、外務省ファイルにはこれらに関連する史料は全くなく、実際の推薦にこれらがいかに使われたのかなど、不明であった。しかし、その内容から判断して、①、②、③、⑥の史料は、ノーベル委員会に提出された推薦状と推測された。

①は、推薦状そのものであり、吉田を1965年ノーベル平和賞に推薦するものであり、実際の署名はないものの、佐藤栄作首相、椎名悦三郎外相、横田喜三郎最高裁判所長官・万国国際法学会会員、栗山茂ハーグ国際仲裁裁判所判事・国際法協会会長（署名順）の4名の名前と肩書が署名欄にタイプ打ちされていた。推薦状の内容であるが、これもすでに筆者は以前に紹介しているため、そこからその重要部分を以下に再録しておきたい。

まず、①であるが、日付、内容から判断して、これが1965年時の推薦状と考えられる。同文書は、1965年1月26日付けで、ノーベル委員会委員長宛てである。まず吉田を1965年ノーベル平和賞候補として推薦すると述べた後、吉田の経歴を簡潔に記している。吉田が太平洋戦争を防止しようとしたが無駄に終わり、その後平和を回復しようと全力を尽くしたこと、軍閥の力が支配的な当時としては多大な勇氣と不屈の精神を要したこと、7週間も投獄されたことに触れている。戦後には外相、首相として7年間、戦争放棄の新憲法の制定を含む様々な政府機構の改革を行ない、さらにサンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約を締結したことを通して、平和、自由、民主主義の新生日本を生み出したとしている。今日、日本がアジアの平和と繁栄のために死活的役割を演じ、世界全体の安寧に貢献しているとも述べている。「吉田が新生日本の創設の父であるといっても、誇張ではない」とも指摘し、その傑出した活動が認められて、この国の最高の勲章である大勲位菊花大綬章を授与されたことにも触れている。最後に、「吉田の世界平和追求の多大な努力と業績により、1965年ノーベル平和賞受賞者として十分資格があると確信し、ここに関連書類とともにこの推薦状を提

出する」と結んでいる<sup>23)</sup>。

以上、推薦状の内容を以前の拙稿から再録したが、その他の史料はこの推薦状を補強するために用意された付属書類と考えられた。詳細は、以前の拙稿に譲るとして、②の吉田の経歴書、③の推薦理由書、⑥の吉田の評伝も、吉田の経歴や政治的立場を紹介し、吉田が戦前の軍国主義とは関係ない人物であることを確認し、さらに戦後、日本の発展の原動力となったことを強調していた<sup>24)</sup>。

### (3) 2015年2月開示の外務省史料

2015年2月、吉田の推薦に関して外務省外交史料館は新たな史料を開示した（以下、同史料を「2015年2月の外務省史料」と略）。吉田の推薦に関わる書類を収録した項目全体が開示されたのである。文書数は、文書の数え方によるが筆者の計算では112文書にのぼり、時期は1965年1月から1967年11月までに出されたものである。文書の大半は、吉田の推薦に関して行なった工作活動を出先の日本大使が外務省本省に向けて報告した公電であり、内容の重要性から「館長符号、極秘」の指定を受けている。なお、「館長符号」とは「外務本省と在外公館長本人との間で連絡を行う必要がある場合に用いられる」指定である。また、「極秘」とは「秘密保全の必要が高く、その漏えいが国の安全、利益等に損害を与えるおそれのある文書に対して行われる」ものであり、「秘」、「取扱注意」よりも高い秘密指定区分である<sup>25)</sup>。多くの公電が「館長符号」と「極秘」の両方の指定を受けていたことからわかるように、吉田の推薦工作は日本外務省において細心の注意を払って秘密裏に行なわれていたのである。

新史料からは、工作活動が1965年、1966年、1967年の3年にわたり日本、ノルウェー、その他の国々の関係者を巻き込み、大規模に展開されていたことが証明された。

吉田推薦に関するこの2015年2月の史料に基づき、以下では特に1965年にいかなる推薦工作が展開されたのかを詳細に検討する。

## 2 1965年の吉田茂推薦をめぐる工作活動

### (1) 推薦の経緯

1965年の推薦状は、1965年1月29日、勝野康助在ノルウェー大使よりノーベル委員会に手交された<sup>26)</sup>。これを報告した勝野の公電には「26日付貴電館長符号に関し、29日御訓令の通り手交した」とあり、本省から1月26日付けで推薦状が送付され、手交するよう指示があったと考えられる（訓令自体は2015年2月の外務省史料には存在しない）。

1月29日に提出されたのは、「佐藤総理、椎名外相、横田最高裁長官、栗山茂4氏署名の書簡および付属書類」であり、付属書類とは「吉田氏略歴、推薦理由書」であった<sup>27)</sup>。これらは、

2014年9月に明らかになった史料のうち、①「1965年1月26日付け推薦状（英文、タイプ打ち3頁）」、②「経歴書（英文、タイプ打ち1頁）」、③「推薦理由書（英文、タイプ打ち2頁）」のことと考えられた。実際に2015年10月にノルウェー・ノーベル委員会が開示した1965年推薦状ファイルには、吉田茂を推薦する推薦状と付属書類が収蔵されていた。すなわち、「佐藤総理、椎名外相、横田最高裁長官、栗山茂4氏署名の書簡」（1965年1月26日付け）<sup>28)</sup>、「吉田氏略歴、推薦理由書」<sup>29)</sup>であり、2014年9月の史料と同一のものが実際にノーベル委員会に提出されていたのである。

推薦状の署名者は、上記の通り佐藤栄作首相、椎名悦三郎外相、横田喜三郎最高裁判所長官、栗山茂ハーグ常設仲裁裁判所判事の4名であった。当時の首相、外相という主要政治家を巻き込む大がかりな推薦活動であったといえよう。なお、推薦状の署名者の選定、さらに推薦状の執筆については、2015年2月の外務省史料に関連する情報はない。

1965年の推薦では、追加資料が外務省で用意され、同年4月30日にノーベル委員会に提出されている。勝野在ノルウェー大使によれば、4月「30日、●● [外務省による非開示部分。その長さにかかわらず●●とする。一筆者、以下同様] に追加資料5部を提出すると共に、大いそ随想及び英文回想10年をぞう呈した」とある<sup>30)</sup>。「追加資料」とは「吉田氏業績調書」のことであり、具体的には「吉田茂の平和に対する熱情、平和憲法と吉田茂、日本の再軍備と吉田茂、経済復興と吉田茂（各英文）」とされるものである<sup>31)</sup>。これは、2014年9月の史料における⑥「吉田の政治活動についての評伝（英文、タイプ打ち24頁）」と同一のものであり、実際にノーベル委員会の1965年推薦状ファイルにも収蔵されていることが確認された<sup>32)</sup>。

また、「大いそ随想及び英文回想10年」とは、吉田の著作2冊である。「大いそ随想」は、吉田が英文誌のために書いたエッセーの日本語原文と英文をまとめたものである<sup>33)</sup>。英文がついているため、追加資料とされたのであろう。また、「英文回想10年」とは、吉田の回想録『回想十年』を子息の吉田健一が英語に抄訳したものである<sup>34)</sup>。この2冊の文献は、現在、ノーベル委員会を支えるノーベル研究所図書館に収蔵されている。

追加資料が用意された背景としては、勝野在ノルウェー大使から黄田次官への1965年2月17日付けの進言がある<sup>35)</sup>。勝野は、以下のように現状の推薦状ではあまりにも簡単とみて、追加資料を提案している。

1. 委員長及び委員会の資格及び経歴より見て特別の工作は遺憾ながらむずかしい。
2. やはり正攻法として本人の伝記と判断の基礎となるべき英文の資料を多く委員会あてに追送することであるが、これも本年は間に合わぬと思われる「大磯随想」にある英文ではとても足りないと思う。
3. 次善の策として毎年受賞式の当日委員長が本人の受賞に値する所以を強調するタイプ12、3頁のスピーチを行うのでこのような資料を委員長あて追送されたら如何と思う。（送付済の推せん状ではあまり簡単）昨年度のスピーチテキスト空送した。（強調は原文）

ここで登場する「昨年度のスピーチテキスト」は、2014年9月報道の史料に出てきた④「1964年12月10日のノーベル平和賞授賞式におけるヤーン・ノーベル委員会委員長によるキング牧師への授与演説（英文、タイプ打ち6頁）」と考えられる。これを参考にして、「追加資料」として上述の「吉田氏業績調書」が急遽作成されたのであろう。

ノーベル委員会側も、勝野大使の報告によれば、「受賞者の最終決定が終るのは10月又は11月始めであるが、追加資料は出来る限り速やかに入手方希望しおる旨答えた」<sup>36)</sup>、「委員長に4月中に追加資料提出方連絡した。なお部数は5部希望」<sup>37)</sup>とあり、追加資料の提出を歓迎している。

## (2) 諸外国からの推薦支持の取り付け

1965年1月29日に吉田を推す推薦状がノーベル委員会へ提出された後、各国に駐在する日本大使は赴任国の有力者に対して吉田の推薦への支持を取り付けようと活発に活動を開始した。以下では、基本的に時系列に添って各国での動きをみてみよう。

### ① スウェーデン

まず鶴岡千仞在スウェーデン大使は、1965年2月20日、「昵懇の間柄」であるグネング（Arne Christian Gunneng）在スウェーデン・ノルウェー大使と懇談し、その内容を黄田次官に伝えている<sup>38)</sup>。グネング大使は、「平和小委員会は極端に自己の独立を尊重する団体である」、「同委員会に対する工作の余地は恐らく皆無であろう」と述べつつも、「とは云え若し日本以外から吉田茂氏を推せんするものが多ければそれだけ同氏の立場は有利になるのではなからうか」と助言している。その上で、「吉田氏が貴使のお話しの通り平和の確立維持に偉業をたてたことは自分もよく承知しているし、同氏の受賞が日本国民大多数の熱望するところであることも良く納得出来る。自分は平和小委員会内の友人に上述の趣旨で私信を書く」と明言している。

この助言を受けて、鶴岡大使は「米国、英国、カナダ、インドその他各国の議員（あるいは議員団）なり、平和団体なり平和賞候補推せんの適格者に吉田元総理推せん方工作されるのが本件推進の適策かと存ずる」と黄田次官に進言している。その後の外務省の活動をみると、まさにこの進言の通りに工作活動が各国で展開されることとなるのである。

鶴岡大使は、2月26日、別の情報も黄田次官に報告している<sup>39)</sup>。鶴岡大使は、「吉田元総理のノーベル平和賞獲得工作につき」協議したこともあるパソンズ（J. Graham Parsons）在スウェーデン米国大使から、2月25日、「当地ノーベル委員会からの情報によると、候補者、関係者は密かに平和賞委員会各委員の説得工作に努めるのが例である由」、「ついでには、自分は極秘裡にライシヤワー [Edwin O. Reischauer 一筆者、以下同様] 大使と、在オスロー米国大使マーガレット・チベット [Margaret Joy Tibbets] とに本件を内報し、然るべく工作方依頼した」との通報を受けている。

吉田推薦をめぐる、外務省はアメリカの外交ルートからも支持を得ることができたのである。ライシヤワー大使とは、在日アメリカ大使である。さらに、外務省は密かにノーベル委員会の各

委員に説得工作をすることが「例である」との貴重な情報も得たのである。その後の外務省の工作活動は、まさにこの路線も実践したものであり、推薦状提出から時間をおかずに提供された鶴岡大使の情報は工作活動を方向づけたと考えることもできよう。

## ② 西ドイツ

西ドイツでは、離任間際の成田勝四郎在ドイツ大使が1965年4月2日にアデナウアー（Konrad Adenauer）元首相を訪問し、推薦状を請うたところ、アデナウアーから「言下に喜んで推薦状を書くとの返事を得たので、本使その好意を謝し改めて材料等そろえてお願いすべき旨述べておいた」と報告している<sup>40</sup>。このように、成田大使はアデナウアーから吉田推薦の支持を取り付けている。

4月23日には、兼松武在ドイツ臨時代理大使がアデナウアーを往訪し、成田大使のアデナウアー宛て書簡、吉田の推薦書、同推薦理由書、略歴書の英文写しと独訳文を手交している<sup>41</sup>。その際、アデナウアーは「自分は、この御依頼をほんとに心からお引き受けするとともに、ぜひ受しよう実現の運びとなるようお助けしたい。くりかえして申し上げるが、ほんとによるこんで推せん状を書きます。（とてナリタ大使書簡および推せん書、同理由書、略歴書をたんに読み返えした後）何とかヨシダ元総理のような方に受しようの機会を作りたい。ヨシダ元総理は自分よりは若い、（とて微しようし、）独裁者の下でく難されたことを含め、ヨシダ元総理が歩まれた道は自分の場合と共通点が多い。特に推せん理由書の中で今まで欧米人のみで、アジア人がいないということを指摘されているのは大変よいポイントであると思う」と述べ、「この推せん状を書くことは期限もあることと思うから、ここ2、3日の中に必ず書いて届けるようにいたします」と約束している。アデナウアーは、吉田と面識があり、さらに「独裁者の下で」苦勞したことなど共通点も多いことから、吉田の推薦を全面的に支持している。

5月3日、アデナウアーから4月26日付の成田大使宛て返簡、28日付のノーベル賞委員会委員長宛て推薦状の写しが日本大使館に届けられている<sup>42</sup>。アデナウアーの推薦状執筆の約束は、若干遅れたものの、守られたのである。

5月27日には、着任した内田藤雄在ドイツ新大使が、アデナウアーと会談した際の発言を本省に報告している<sup>43</sup>。アデナウアーは、吉田のノーベル平和賞推薦について「自分はアジアより受しよう者が出ることはときに適したものと考えており友人ヨシダ氏がその選に当ることになれば最も仕合わせと考え既に所要の措置をとつたし、今後もお努力する考えである。自分は実現の可能性十分にありと考えている旨述べていた」とされる。

アデナウアーがノーベル委員会委員長宛てに送ったとされる推薦状の写し自体は2015年2月の外務省史料には存在しないが、アデナウアーが吉田を強く支持する推薦状を書いたことは公電から明らかであった。また、「実現の可能性十分にありと考えている」というアデナウアーの発言は、外務省関係者を喜ばせたと考えられる。

アデナウアーの推薦状は、ノーベル委員会の1965年推薦状ファイルに収蔵されていた。同推

薦状は、1965年4月28日付けのドイツ語2頁のものである（差出地は、別荘のあった北イタリア・コモ湖畔のカデナビア）<sup>44)</sup>。差出日は、上述の外務省史料に出てきた日付と同一である。推薦状では、アデナウアーはまず佐藤首相らが1965年ノーベル平和賞候補に吉田を推薦するためにイニシアティブをとっていることを知り、大きな喜びとするところであると述べた後、吉田の業績について触れている。すなわち、「私は、ドイツ連邦政府首相、ドイツ連邦共和国外相としての職務を通じて吉田氏を知り、氏ほど平和のために、また自由と民主主義のために終始一貫、その全精力を捧げてこられた方は他にほとんどいないと高く評価してきました。私は、吉田氏とは氏が日本の首相、外相としての公職を辞された後もなお常に接触があり、それゆえに氏がいかに諸国民の和解と世界平和という理想のために全力を尽くされてきたか、存じております」。これに続けて、アデナウアーは「この功労ある政治家にノーベル平和賞が授与され、それにより氏がアジア初の代表者としてこの高貴な賞の受賞者となりますならば、それは何億人もの人口を有するこのアジア地域全体にとりましても大きな意義をもつことになりましょう」とも述べ、吉田の受賞がアジアにとっても意義深いことを強調している。

以上のように、アデナウアーは同時期に首相、外相を務めた吉田に対して親近感をもっており、彼のノーベル平和賞推薦を全面的に支持し、ノーベル委員会に推薦を行なったのである。

### ③ アメリカ

アメリカでの活動については、武内龍次在アメリカ大使、松井明在国連大使に対して「然る可き米国有力者に工作方訓令ずみ」<sup>45)</sup>であったところ、1965年4月28日、武内大使から報告と照会が本省に対してなされている<sup>46)</sup>。まず、武内大使は、「本使としても種々考慮の結果、ラスク [Dean Rusk] 国務長官、アチソン [Dean Acheson] 元国務長官、フルブライト [James William Fulbright] 上院議員および場合によりハンフリー [Hubert H. Humphrey] 副大統領に依頼してはどうかと一応考えているが、(松井大使はカーク [Grayson Kirk]、コロンビア大学総長、デューイ [Thomas E. Dewey] 元ニューヨーク州知事、および場合により、バンチ [Ralph Bunche] 国連事務次長を考慮中の趣)」と、働きかける候補を列举し、さらに「本使心得」のため推薦工作の状況について本省に対して質問をしている。その中で、推薦者の地域的配分や人数について意見を交えて質問を行っており、重要な指摘と考えられるので、以下、引用する。

すなわち、「アデナウアーの外には推薦状を依頼せられたものはないようにも見えるが、吉田氏の経歴および人物から云って、他の欧州諸国（例えば仏）より推薦者を見つけることは容易なるべく、殊にかつて在勤せられた英国およびイタリアより有力者の推薦のないことは、寧ろ、不自然にも見える。また初めてのアジア人という点からは、アジア諸国の中からも推薦者を依頼せられることも一案かと思えるが、如何考えられるか、何れにしる、現在までに推薦状送付を依頼せられた人、および将来、依頼せられんとする人を承知致したい。更にノールウェー地元における本件成否の見通し、ないし、工作振り等についてもご通報願いたい」と述べ、武内大使はヨーロッパ、アジアから推薦者を出すことを進言している。

また、武内大使は推薦者の人数についても「万一、米国以外ではアデナウアーのみが推薦状を書くのであれば、米国のみから5人も6人もの推薦状が出るのは、やや権衡を失するかとも思われるが、それでも差支えないか、その場合は当方としては前記の6、7名が最適任とは思いますが、右人選についての御感触如何」（強調は原文）と述べ、アメリカからの推薦者数を絞る可能性にも触れている。これに対する本省からの回答は、2015年2月の外務省史料には収録されておらず、外務省の方針を確認することはできない。しかし、その後の展開からみると、ヨーロッパ、アジアからも推薦者を模索し、アメリカからの推薦者数を絞る方向になったと考えられる。

その後、武内大使は、ラスク国務長官との面会を申し込むが、先方が多忙のため、会えない状況が続き、1965年5月28日、バンディ（William P. Bundy）次官補と会見している。その際、「ラスク長官よりノーベル委員会に申入方依頼したところ、先方はライシャワー大使よりの電報にて事情を承知しており早速同長官に話した上返事すべき旨述べた。（なお、昨年と異なり今年は米国人を推している動きについては聞き及んでいない旨述べた）」、さらに「その際先方より貴大使より話があればディーン、アチソンは喜んで推せんを行うと思うが貴大使にはその御意向なきやと質問したので、本使より自分もそのことを考えたが東京では余り米国人ばかり多くなることを避けたい意向があるようであるから一応見送っている次第であるが、もう少し考えさせてもらいたいと答えておいた」とも報告している<sup>47)</sup>。

このように、武内大使は推薦者としてラスク長官を考えていたが、面会したバンディ次官補からアチソン元国務長官を提案され、アチソンへの依頼の可能性について本省に照会している。武内によれば、バンディ次官補は、「アチソンの女婿であり本使とアチソンの間柄を知っているからであると思はれる」と背景を説明している。

6月3日、武内大使は、アチソンを訪問し、吉田支持の推薦状の執筆を依頼し、「その快諾を得た」<sup>48)</sup>。ラスク長官よりの分については、「2日バンディ次官補より却って逆効果となる恐れあるにつき差控えたし、との趣旨の話あり」と報告し、ラスク長官への依頼を取り下げている。なお、「却って逆効果となる恐れある」理由については、武内は「詳細は従来本件については黄田次官、ライシャワー大使間に話合が行はれて来た次第に鑑み東京にて御説明すべしとのことであった」と報告している。

以上の経緯から、アメリカではアチソン元国務長官から推薦状を取り付けることになった。そのアチソンからの推薦状については、6月「17日ディーンアチソン氏より本使あて書簡をもって同氏が14日付にてノーベル委員会委員長あて吉田元総理の平和賞受賞に関する推せん状を発送した旨通報越した」と武内大使は本省に報告している<sup>49)</sup>。

アチソン元国務長官からの推薦状は、1915年2月の外務省史料には収蔵されていなかった。同推薦状はノーベル委員会の1965年推薦状ファイルに見出すことができる<sup>50)</sup>。アチソンは、1965年6月14日付け推薦状で、まず佐藤首相、椎名外相による吉田のノーベル平和賞推薦を支持していることに触れた後、以下のように吉田を高く評価するコメントを記している。

「言葉の真の意味において、吉田氏はピースメーカーであった。1951年9月にサンフランシスコで署名された日本・旧敵国間の平和条約は、戦争状態の儀礼的終結をはるかに超えるものであった。それは、和解の行為であり、和解の講和を生み出したのであり、それにより敵意の原因は取り去られ、他の諸国民への支配は終わり、損害の補償は行なわれ、多数の人々はもう一度行動の指針を始め、自らの人生や他の人々すべてとの関係を作り直していったのである。

この偉大で想像力に富む仕事を、日本のために吉田が行なったのである。彼は、講和の条件を考え出す困難な任務を指揮したのみならず、自国民にそれを熱狂的に受け入れさせ、また彼自身と自国民の誠実さと善意を条約のもう一方の当事者にわかってもらうという一層困難な任務を指揮したのである。彼は、和平のために刑務所や身の危険を経験し、和平と善意の人と信頼されていたために、これをなし得たのであろう。」

アチソンは、以上の指摘が個人的な見聞に裏打ちされていることを強調した後、「1951年のあの困難で重大な日々、吉田氏への高い敬意と称賛は暖かい友情の敬意に熟成した」と述べ、さらに「人々の平和への奉仕はいわゆる西洋に限定されない。アジアの政治家の貢献——極めて重大な時の偉大な貢献——を認めるならば、ノーベル平和賞は世界規模の重要性を獲得することになる」と締めくくっている。

以上のように、アチソンは1951年のサンフランシスコ平和条約の締結交渉における吉田の貢献を高く評価してノーベル平和賞に推薦したのである。また、推薦状の最後では、アジアから受賞者を出すことの意義についても触れていた。

#### ④ イギリス

吉田推薦をめぐる働きかけは、イギリスにおいても行なわれた。1965年4月時点で、「在英島大使を通じ；イーデン [Anthony Eden] 元首相、又はソーニクロフト [Peter Thorneycroft] 元国防相に吉田氏推薦方工作するよう訓令ずみ」<sup>51)</sup>とされていたが、同年6月3日、島重信在イギリス大使は「お申越しの両人のうちイーデン元外相 (Earl of Avon) に依頼するほうが良いと考え」、面会を求め、「10日同伯爵が他用でロンドンに来る機会に会うこととなった」旨、本省に報告している<sup>52)</sup>。しかし、イーデンの健康上の理由で面会日時はずれ<sup>53)</sup>、結局6月16日、島大使がイーデンを往訪している。イーデンは、「吉田氏は平和賞候補者として極めて適格者と信じるので喜んで支持する。但し自分はどうかやれば最も効果的な支持が出来るか知らないので先づ旧知のリー [Trygve Halvdan Lie] 元国連事務総長に内々相談し、その意見に従って措置することにしよう」と述べたとされる<sup>54)</sup>。

この第1回推薦におけるイーデンの支持については、1967年1月、第3回目の吉田推薦を準備する際、過去2年の推薦状況を外務省がまとめた文書において、「イーデンにも依頼したが、応じなかった模様」と記されていた<sup>55)</sup>。イーデンが吉田支持の推薦状を最終的に出したか否かについて、2015年2月の外務省史料では判明しなかった。ノーベル委員会の1965年推薦状ファイ

ルにイーデンの推薦状が存在しないことを考えると、イーデンは日本側の依頼に応じなかったと考えられる。

⑤ その他

以上の4カ国以外に対しても日本外務省は働きかけを行なっている。東京において、1965年4月時点で「黄田次官より；(イ) 在京ノルウェー大使 (ロ) 在京エマーソン [John K. Emmerson]・米公使に対し然るべく工作方依頼」との指摘があり<sup>56)</sup>、外務省は国内外で働きかけを行なっていたと考えられる。また、本省では米、英に加えてアジア、フランス、イタリアの政治家への働きかけも検討した形跡があるが<sup>57)</sup>、1967年1月の外務省作成文書をみる限り<sup>58)</sup>、アジア、フランス、イタリアの政治家への働きかけは実際には1965年の推薦工作では行なわれなかったと考えられる。

以上、1965年に日本外務省が各国に対して吉田推薦の工作活動をしたことを示した。多数の外交官が動員され、各国の政治家、外交官に働きかけをしたことがわかる。

### (3) ノーベル委員会への働きかけ

1965年には、ノーベル平和賞を選考するノルウェー・ノーベル委員会への直接の働きかけが、勝野康助在ノルウェー大使を中心に極めて活発に行なわれた。時系列に沿ってその工作活動をみてみよう。結論から言えば、1965年の勝野大使の工作は、同年春頃までは必ずしも活発なものではなかったが、夏が終わる時期から本格化したと指摘できる。以下では、①1965年夏まで、②1965年秋以降の2つの時期に分けて紹介する。

① 1965年夏まで

ノーベル委員会に吉田の推薦状を提出した1965年1月29日、ノルウェー通信社の報道として、勝野大使は「スウェーデン国会議員の一部が同日イタリア社会改革家、且平和の闘士であるDANILO DOLOIを、又オランダ国会下院議員60名が国際エスペラント協会をそれぞれ平和賞候補に推せんした旨」本省に報告している<sup>59)</sup>。なお、2015年に開示されたノーベル委員会の1965年推薦状ファイルによれば、勝野大使が報告した通り、2候補は確かに推薦されている<sup>60)</sup>。

1965年2月17日には、勝野大使は、本章第1節の推薦の経緯でも取り上げたように、「委員長及び委員会の資格及び経歴より見て特別の工作は遺憾ながらむずかしい」と考え、追加資料の作成、追送を本省に提案していた<sup>61)</sup>。また、追加資料に対するノーベル委員会側の前向きな反応も本省に伝えていたのである<sup>62)</sup>。

3月2日には、勝野大使は、ノーベル平和賞委員会委員4名の略歴、住所(2015年2月の外務省史料では住所部分は非開示で黒塗り)を調べ、「ご参考まで」として本省に報告している<sup>63)</sup>。なお、この電信の冒頭に「1日付スウェーデン発館長符号に関し」と付されていることを考えると、委員の詳細に言及した電信を鶴岡在スウェーデン大使が出していたと考えられる(この3月1日付けの鶴岡大使発の電信は2015年2月の外務省史料には収蔵されていない)。

ノーベル賞の国際政治学

表 ノーベル委員会委員の構成（1965～1967年）

年	保守党	自由党	キリスト教国民党	労働党1	労働党2	労働党3	党派なし
1965	Lyng, John (1905～1978年) 国会議員・元首相 1965年10月12日 外相就任。これ以 後は、委員として の名前は残るもの の、代理として Wikborg が参加。	Jahn, Gunnar (1883～1971年) 元財務相・元ノル ウェー中央銀行総 裁 ノーベル委員会委 員長			Natvig-Pedersen, Gustav (1893～1965年) 元国会議員・元国会 副議長・元国会議長 ノーベル委員会副委 員長 1965年7月27日死去	Langhelle, Nils (1907～1967年) 国会議員・国会議長・ 国会副議長 1965年9月15日ノー ベル委員会副委員長 就任。	
1966			Lyngの代理 Wikborg, Erling (1894～1992年) 元国会議員・元外 相・弁護士	Lionaes, Aase* (1907～1999年) 国会議員・上院副 議長			Natvig-Pedersen の 代理 Refsum, Helge (1897～1976年) オスロ裁判所判事・ ベルゲン裁判所判事
1967	Ingvaldsen, Bernt (1902～1985年) 国会議員・国会議 長ノーベル委員会 副委員長	Rognlien, Helge (1920～2001年) 裁判所長・県議会 議員				Langhelle, Nils 国会副議長 ノーベル委員会委員 長 1967年8月28日死去	Refsum, Helge 元ベルゲン裁判所判 事
	Ingvaldsen, Bernt ノーベル委員会委 員長		Langhelle の後任 Wikborg, Erling				

註 \*は女性。委員の党派色を示した。政党は便宜的に左右軸で右派から左派の順に並べた。人名の後の西暦は生没年を示す。  
出所 ノーベル財団年次報告書 *Les Prix Nobel*、ノーベル財団ホームページ< <http://www.nobelprize.org/>>、ノルウェー国会ホームページ< <http://www.stortinget.no/>>を基にして筆者作成。

勝野大使が報告した4名のノーベル委員会委員とは、委員長 Gunnar Jahn、副委員長 G. Natvig-Pedersen、委員 Aase Wind Lionaes、委員 Nils Langhelle の4名である。もう1名の委員 John Lyng は取り上げられていない。ノーベル委員会の記録によれば、Lyng は1965年には休職中とされ、同年10月の外相就任に伴い、代理の Erling Wikborg が委員会に出席することになった。吉田が推薦された1965年から1967年までのノーベル委員会委員は、筆者作成の表の通りである。

4月30日には、勝野大使はノーベル委員会に吉田に関する追加資料を提出したが、この時に対応したノーベル委員会の関係者（氏名は非開示。委員か）に有力候補について率直に尋ねている。それに対しては、「●●は、『これは言明できない。MANY, MANY OF THEM, AMONG THEM AMERICAN ○○○○○○, AND WE MUST WAIT AND SEE. しかし、自分個人としては本件につき十分な考慮を払っていると申し上げる』と答えた」と、勝野大使は本省に報告している<sup>64)</sup>。吉田の推薦に関して返答は得ているものの、選考に関して有力候補の情報を得ることはできなかった。

② 1965年秋以降

1965年9月に入ると、勝野大使はノーベル委員会に対して積極的に働きかけを開始している。まず9月1日、●●（委員か）を往訪し、会談している<sup>65)</sup>。ノーベル委員会の審議の模様に関する質問に対して、「9月中旬に予備会議が行われ、10月下旬の最終会議で決定されるまでは何とも申し上げられぬと答えた」との回答を得ている。また、吉田の人格見識、受賞見込みについての質問に対して、「資料は確に拝見した。HE IS A VERY FINE MAN.と答えたのみでこれ以上深入りするのを避けた」ということになり、十分な情報は得られていない。他国からの吉田支持の推

薦状については、「推薦状は受け取られたかとの間に対しアデナウアー<sup>ママ</sup>および米国人より貰っていると答えたのでアチソンかと名指すと然りと答えた」とあり、アデナウアー、アチソンからの推薦状が届いていることが確認されている。ノルウェーでは、9月13日に国会総選挙が実施されることになっており、勝野大使は「その後のできるだけ早い機会に他の委員を順次往訪して依頼する予定である」と今後の工作活動に積極的な姿勢を示している。

9月下旬になり、その工作活動は本格化する。9月29日、勝野大使は、ノーベル委員会委員4名との面会の予定を本省に報告している<sup>66)</sup>。すなわち、まず1人目として「●●と10月1日面会のアポイントメントをとつた」。次に2人目として「●●滞在中の趣につき、然るべくアプローチされては如何かと存ずる（ただし10月中に審議が行なわれるすると本人は参加できない訳だから、代理が指定されているかも知れない。）」[この委員は、ニューヨークの国連総会にノルウェー代表団の一員として出席中のリオネス委員かもしれない]。3人目として「副委員[長]たりしG. NATVIG-PEDERSEN氏は死亡し、●●[非開示であるが、これはHelge Refsum委員と特定できる]が後任となった由につき、書面でオスロー来訪予定を確めた上で面会をアレンジすべく手配中」。最後に4人目として「●●として総選挙後●●に上っており、多忙のためなお面会アレンジ中」としている。ノーベル委員会の各委員との面会にむけて、勝野大使が積極的に動き始めた様子が伝わってくる。

10月1日、勝野大使は予定通り●●（ノーベル委員会委員）と面会している<sup>67)</sup>。その際、勝野は日本の国会議員等訪問者の接待への配慮に礼を述べており、発言中に総選挙のことも出た。そのため、この委員は国会の有力現役議員と考えられ、その後の面会者から消去法で判断すると、ラングヘレ国会議長の可能性が高い。

同委員は、吉田が候補であることは知るが、多忙のため資料を受け取ったかは知らないと答えたため、勝野大使は資料を一部おくとともに、簡単に吉田の説明をしている。特に、「日本のぼうけんのきつかけとなつた三国同盟、シナ事変に対するヨシダ氏の徹ていせる国際平和主義、駐英大使後の失きやく、軍部の反感、投ごく、戦後のCOMEBACKならびに平和けん法」について力説した後、「東アの平和がかくの如くみだれている現在、この地方から一人も受しよう者の出ていないことに十分の政治的考慮を払つ<sup>ママ</sup>わられてしかるべきであると主張したところ、●●は同感の気持を示し、10月末ごろ会議があるので自分も総選挙後余ゆうもあるべく、とくと資料はい見しん重に考慮いたしたいと述べた」と勝野は報告している。

10月4日には、勝野大使は別の委員にも面会している<sup>68)</sup>。勝野大使は、●●に対し、近く●●に就任することに祝辞を呈し、後任者に引き継ぎを依頼している。その際、●●は「自分は近く●●となるので、規定によつて平和しよう委員会の委員にとどまることはできなくなる」と述べている。政府の閣僚はノーベル委員会委員としての資格を失うとの規定があることから、この日に面会したのは外相に就任予定のリュングと考えられる。

10月6日には、勝野大使は追加資料2部を至急送付してほしい旨を本省に依頼している<sup>69)</sup>。

ノーベル委員会委員に対する勝野大使の活発な工作活動の結果、配布する資料が不足したと考えられる。

勝野大使は、10月15日にもノーベル委員会関係者●●(前後の面会者から消去法で判断すると、ヤーン委員長の可能性が高い)と会見している<sup>70)</sup>。新聞等に出た有力候補情報(イタリアのドルチ、救世軍、ウ・タント [Situ U Thant])について、決して委員会の決定が行なわれたわけではないことを確認した上で、勝野は、いつ最後の決定がなされるかを質したが、「これはTOP SECRET であつて申上げられない」との回答しか得られなかった。しかし、日本の候補者については、面会者から「日本のこう補者が推せんされていることはよく知つているし、御提出の資料は極めて有益であつたと述べた」と本省に報告している。

この面会者から、勝野は、別の委員●●(新任)に出していた面会の申し込みについて、時間がないとの理由で断られたことを伝えられている。勝野自身は、「面会をけいえん」されたとみている。この報告に続き、「●●の後任の●●(2年前の短期保守連立政権のときの●●)には、18日面会の約束を取つた」と勝野は記している。これは、当時のノルウェー政治から考えると、「リュングの後任のヴィクボルグ(2年前の短期保守連立政権のときの外相)には、18日面会の約束を取つた」という意味であろう。1965年に交代した委員は、ヴィクボルグとレフスムの2名であることから、「面会をけいえん」した委員は、レフスムと判断できる。

同月18日に会見した●●(ヴィクボルグ委員か)は、勝野大使に対して、吉田が有名な政治家であることはよく承知していると答えている<sup>71)</sup>。また、吉田が現役を引退していることから、後で何をしでかすかわからないという危険がないことで面会者と勝野は一致している。最後に、勝野は資料を熟読し、「東アの現下の情勢にかんがみ日本の候補を支持」するよう依頼したのである。

勝野大使は、吉田の支持を申し入れるため、同月21日にもノーベル委員会委員●●と会見している<sup>72)</sup>。これが受賞者決定以前に会った最後の委員となる。同委員は、「単に御提出の資料のみでなく委員会に付ちされている ADVISORY GROUP が今しゆん以来しゆう集した各こう補の家てい事情をも含めた詳細な資料をえつ了しこう正な判断を期していると答え、更に当方の決定の手續に関する質問に対し、大体今月末までに有力なこう補を2人にしぼつた上で委員会で無記名投票の結果多数決による決定が行われる」と内話している。さらに「本使より御存知のとおり日本の経済的発展は世界注目のマトであるが、この事じつは戦後において日本国民が平和主義に徹し平和のかん境において努力した結果であり、このように日本国民を指導したのは他ならぬヨシダこう補その人であつて、かれの政治的手わんと識見こそ他の東アの指導者が夫々の平和とはん栄のために以て範となすべきものであると思料すると力説したところ、●●は全く同感の意を表した」と勝野は報告している。

この面会者について、勝野は「対談者が●●であつて表現がやわらかであるせいもあるが、本使対談中日本こう補に対する見込みについて、●●の発言態度からはいささかも NEGATIVE

な印象は受けとれなかつた（他の委員についても同様であつたが、●●についてはむしろ FAVORABLE に受けとれた）」とも書いている。勝野はこの委員から前向きな支持を得たと判断している。なお、「●●[2文字分のスペース]であつて表現がやわらかであるせい」との文章から、この面会者は女性である可能性が高い。当時のノーベル委員会の女性は、リオネス委員のみであることから、このときの面会者はリオネス委員であろう。

21日の面会者に対する工作活動は、ノルウェーだけで行なわれたわけではなく、ニューヨークでも行なわれていた。21日の会見で、勝野大使は「国連におけるマツイ大使との会見に言及しつつ、本使もヨシダこう補の支持方申入れに参上したものと説明していたからである。その国連での会見についても記録が残っている。

10月5日、松井明在国連大使は、●●と会見し、援助を得たいと申し入れるが、初対面であり、「十分肚を割った話は出来ず、●●としても必要以上に慎重な態度を取ったものと認められる」となった<sup>73)</sup>。面会者は、「ノーベル平和賞の銓衡手続については一切外部にお話ししないことになつているので遺憾ながら内情をお伝えるわけに行かない。しかし銓衡委員会は数多くの資料を綿密かつ公平に審議しているので銓衡が極めてフェアに行われることは断言し得る」、「自分は2、3日中にオスローに帰るので本日お話のあったことは関係の向きに伝えると共に、銓衡に際しては十分考慮することと致したいと述べた」と、松井は報告している。

ノーベル委員会の選考についての内容、また選考の最終段階でニューヨークにおいて国連大使を動員してまでわざわざ会った事実から、松井が面会した氏名非開示の人物は、ノーベル委員会委員と考えるのが自然であろう。9月29日に、勝野大使がノーベル委員会委員と面会予定の状況報告をした際、委員の一人について「●●滞在中の趣につき、然るべくアプローチされては如何かと存ずる（ただし10月中旬に審議が行なわれるとすると本人は参加できない訳だから、代理が指定されているかも知れない。）」と述べている<sup>74)</sup>。内容から国外にいるとも考えられ、この委員が上記の松井大使の面会者である可能性が高い。

これに該当するノーベル委員会委員がいるか検討すると、1名が浮かび上がる。リオネス委員（労働党所属の女性国会議員）である。同委員は、1946年から国連総会のノルウェー代表団の一員を務めており、国連総会の開催される秋は毎年ニューヨークにいたと考えられるのである。

以上、1965年9月、10月に勝野大使を中心にノーベル委員会委員への集中的な工作活動が展開されたことを紹介した。これが委員に対してどの程度の効果をもったかについては、判断することは難しい。しかし、勝野は、一人を除き代理を含む委員に面会し、資料つきで候補としての吉田を売り込み、その存在をアピールできたと考えられる。少なくとも吉田の人物像に対する委員の理解は進んだと考えられる。無論、最終的に委員がいかなる判断をするかは、委員の考え次第であった。

### 3 1965年のノーベル委員会の評価と日本の対応

#### (1) ノーベル委員会の評価

ノーベル委員会は、吉田の推薦をいかに評価していたのであろうか。ノーベル委員会が開示した選考史料に基づいて考えてみよう。

1965年には、31候補がノーベル委員会に推薦されていた。候補の内訳は個人24、団体7である<sup>75)</sup>。個人では吉田茂のほか、イスラエルの哲学者、ブーバー (Martin Buber)、オーストリアの伯爵、クーデンホーフ＝カレルギー (Richard Coudenhove-Kalergi)、アメリカのジャーナリスト、カズンズ (Norman Cousins)、ローマ教皇、パウロ6世 (Paul VI)、アメリカの政治家、スティーブンソン (Adlai Stevenson)、国連事務総長ウ・タントなどである。団体では、救世軍、国際法協会、国際法律家委員会、UNICEF、世界エスペラント協会、婦人国際平和自由連盟、世界退役軍人連盟である。

以上の31候補のうち、いわゆるショートリストに選ばれ、報告書が作成されたのは12候補であった<sup>76)</sup>。個人ではカズンズ、スティーブンソン、ウ・タントらとともに吉田も選ばれ、団体では救世軍、国際法律家委員会、UNICEF、婦人国際平和自由連盟が選ばれている。吉田は、選考で注目された候補として絞り込まれた中に入っていたのである。

それでは、吉田に関する報告書に基づき、ノーベル委員会の吉田評価を考えてみよう。吉田の報告書は7頁にわたるが、これは吉田に関する初の報告書であったため、人物紹介を含めて詳細に作成されたためである。執筆者は、ノーベル委員会のアドヴァイザーであるムンテ (Preben Munthe) であった。ムンテ (1922～2013年) は、オスロ大学の経済学教授であり、数多くの専門書を執筆するとともに、数多くの審議委員も歴任した。ノーベル委員会のアドヴァイザーは、1959年から1983年まで務めた<sup>77)</sup>。

では、吉田に関する報告書の中身をみてみよう。紙幅の都合もあり、細かく紹介することはできないため、報告書のポイントを整理したい。報告書は、大きく4つの部分から構成されている。すなわち、推薦者と推薦理由、第二次世界大戦前の人物紹介、第二次世界大戦後の人物紹介、吉田の業績に関する分析である。

報告書は、まず冒頭において佐藤首相、椎名悦三郎外相ら日本の著名政治家、官僚4名が吉田元首相を推薦していることに触れている<sup>78)</sup>。推薦理由として彼らが「第二次世界大戦中に行なわれた政治に対する吉田の抵抗、さらに平和志向と民主主義の新日本の再建における吉田の貢献を強調している」と述べ、さらに推薦状末尾の文言を引用しつつ、吉田がアジア、さらに全世界の平和の維持に貢献していると主張していることを紹介している。

この後、吉田の人物紹介が始まっている。基本的に日本外務省が提出した吉田の資料などを土台にして、吉田の人生を第二次世界大戦の前後に分けて概観している。戦前においては、1878

年9月22日生まれで、吉田家の養子になったこと、東京帝国大学で法学を学んだ後、外務省に入省したこと、次官、在イタリア大使、在イギリス大使を歴任したこと、1936年の組閣では吉田の西洋志向のために軍指導者の反対で外相に指名されなかったこと、戦争末期には和平交渉の議論に引き込まれ、1945年4月には憲兵隊に逮捕され、40日間留置されたこと（面会や差し入れを受けられたことから、その留置は特に苛酷なものではなかった）などが触れられている<sup>79)</sup>。

戦前部分で日本側の吉田紹介と特に異なる点として、吉田が中国、満州の日本の在外公館にいたときに、満州における日本の膨張を助長することにかかわったと言及していることがある。この点について、1946年、1954年の *U. S. News & World Report* の記事を引用し、さらに A. Morgan Young による1938年刊行の *Imperial Japan* にも同様の情報があると報告書は指摘している<sup>80)</sup>。

戦後の吉田については、報告書は戦前部分よりも詳細に論じている<sup>81)</sup>。連合国の占領下で吉田が政治の舞台に出たこと、1945年9月17日に東久邇内閣の外相になり、幣原内閣でも留任したこと、1946年4月10日の初の総選挙後、鳩山一郎が追放されたため、吉田が自由党党首、首相となり、外相も兼任したこと、1947年4月20日の総選挙で、吉田内閣が野に下ったこと、1948年10月、吉田が少数政府ではあったものの、政権に復帰したこと、1949年1月の総選挙で、絶対多数を得て、翌月、第3次吉田内閣が発足したこと、1952年10月の総選挙でも絶対多数を維持し、吉田は続投し、第4次内閣を組閣したこと（外相兼任はやめる）、反吉田勢力が増え、鳩山が政界に復帰したが、1953年4月の総選挙を経て翌月に第5次内閣を組閣したこと、1954年12月に不信任案の上程、採択が避けられなくなり、吉田が党首、首相を辞任したことなどが時系列に沿って説明されている。

報告書の戦後部分の吉田紹介で特に目を引くことは、1954年12月に吉田内閣を倒した不信任案の動きを詳しく紹介していることである。すなわち、造船疑獄において、吉田首相は法相に指示をして著名政治家（報告書に具体名はない。佐藤栄作自由党幹事長をさすと考えられる）の逮捕を拒否させたため、吉田は衆議院議長から決算委員会への召喚をたびたび受けた。しかし、吉田が政府の公務を理由にそれを拒んだ結果、決算委員会は吉田への告発動議を採択し、全野党は近づいた長期外遊の中止を吉田に求めた。自由党内の分裂は続き、吉田の外遊中、新党、民主党の結成の動きも出た。吉田の帰国時、吉田への支持は激減し、吉田は党首を辞めざるを得ず、鳩山一郎が新首相に就任したのである<sup>82)</sup>。

以上のように、報告書は、吉田の紹介を書く上で、日本側の推薦状と資料のみに頼らずに、独自の情報源により、吉田の活動の功罪を冷静に紹介している。

報告書は、さらに吉田の業績に関する分析に進んでいる<sup>83)</sup>。まず吉田の政権時期が日本の戦後期の比較的安定した時期になっており、吉田自身が「強い」首相であり続けたと指摘し、それがいくつかの条件によるものであるとする。憲法によれば、首相は強い権力をもつが、実際には政党的強さが横並びであったため、その権力はかなり弱く、連立、妥協が必要となり、そのため戦

後期の多くの内閣が弱かったとする。

しかし、戦後期の弱い政府の唯一の例外が、1948～54年の吉田内閣であったとする。国会で絶対多数を持っていたこと、多くの指導的政治家が占領当局により追放された後、政党で権力を握ったこと、党の重要ポストに吉田自身の支持者をつけたこと、党の利益のために占領当局の権力をうまく利用したことなどが指摘された後、吉田が極めて個性的な政治を行なった強い政治家であったと指摘している。

報告書は、さらに連合国が経済政策を変更した時期に吉田が政権に就いたことにも触れ、経済面についても詳しく説明している。すなわち、当初産業を統制下におこうとした後、連合国は経済拡大に関心をもつようになり、特にアメリカは経済援助の負担を減らしたかったこと、朝鮮戦争により、アメリカは日本を経済的に強い同盟国にすることに利益を見出したことも明らかであるとしている。こうした経済政策により成長と生活水準の向上が見られ、国民の人気が出て、それが政権の人気にもつながったとも指摘している。

軍事政治面では、多くの国内行政が日本人により行われており、1952年4月28日に平和条約が発効し、占領が終ったこと、実際には軍隊である警察部門を設立することができたとしている。

さらに、報告書は、吉田がアメリカ当局、特にマッカーサー（Douglas MacArthur）将軍とうまく協力することで首相として政策を立てたと述べ、吉田が良き敗者として振る舞おうとし、協力の強い意志をもち続けたとしている。その一環で、報告書は、トルーマン（Harry S. Truman）大統領がマッカーサーを解任した際、吉田が行なったラジオ演説を引用し、マッカーサーに対する吉田の感謝の言葉を紹介している。さらに、『フォーリン・アフェアーズ』1951年1月号の吉田論文も引用され<sup>84)</sup>、国家再建という困難な任務において連合国の指導、支援に対して深く感謝する旨の吉田の言葉が紹介されている。

G H Qについて、報告書は吉田の回想録（1962年）に基づいて実務的な軍人と理想主義的なニューディール支持者の2つのグループがあり、吉田が後者に批判的であったことを指摘している。具体的には、吉田が政治家の追放、財閥の解体、共産党と労働組合へのリベラルな態度を批判していたことに触れ、吉田が共産主義、社会主義への反対者であったとしている。

報告書は、吉田が政治的に保守的な人間であり、回想録で自ら西ドイツのアデナウアー首相との間に共通点が多いと指摘していることに触れている。その上で、1954年に吉田が訪欧した際、アデナウアーに面会した時のことを、吉田の回想録から長い引用に基づいて紹介している<sup>85)</sup>。すなわち、吉田自身、アデナウアーと性格が似ており、占領下の首相など経歴も似ていると記しているところが引用されている。この点を受けて、報告書は、アデナウアーが吉田のノーベル平和賞推薦を支持していることに触れている。さらに、報告書は、アメリカのアチソン元国務長官がノーベル委員会宛ての書簡において日本と連合国との講和の際に果たした吉田の役割を強調していると述べ、以下の通りアチソン書簡の大部分を引用して報告書を終えている。

「1951年9月にサンフランシスコで署名された日本・旧敵国間の平和条約は、戦争状態の儀

礼的終結をはるかに超えるものであった。それは、和解の行為であり、和解の講和を生み出したのであり、それにより敵意の原因は取り去られ、他の諸国民への支配は終わり、損害の補償は行なわれ、多数の人々はもう一度行動の指針を始め、自らの人生や他の人々すべてとの関係を作り直していったのである。

この偉大で想像力に富む仕事を、日本のために吉田が行なったのである。彼は、講和の条件を考え出す困難な任務を指揮したのみならず、自国民にそれを熱狂的に受け入れさせ、また彼自身と自国民の誠実さと善意を条約のもう一方の当事者にわかってもらうという一層困難な任務を指揮したのである。彼は、和平のために刑務所や身の危険を経験し、和平と善意の人と信頼されていたために、これをなし得たのであろう。」<sup>86)</sup>

以上、ノーベル委員会の吉田報告書の主要点をまとめたが、報告書は吉田の人物紹介を政治、経済、軍事、安全保障など様々な観点から行なっている。その際、吉田自身の著作や論文、さらに専門書、ニュース記事などを駆使して、日本外務省が提供した資料以上の深い分析をしていた。ノーベル研究所に所蔵されている吉田の回想録の英訳本には、報告書執筆者のムンテにより深く読み込まれたと考えられる書き込み(鉛筆)跡が残っている。それは報告書の引用箇所とも一致する。

ムンテは、日本外務省が強調していた平和国家づくりや経済復興の面で吉田が果たした役割についてほとんど注目していない。新憲法が制定された事実のみが触れられており、吉田との関連は示されていない。また、吉田の政治面の活動については、マッカーサーとの親密な関係など、占領軍との協力関係の下で吉田の政治的強さが形成されたことが詳しく紹介され、経済復興では連合国主導の経済政策が冷静に分析されている。このように、すべてを吉田の業績に帰す見方とは一線を画している。講和に関しては、アチソンによる推薦状の評価がそのまま引用の形で紹介されている。

報告書全体を通して伝わってくることは、吉田が第二次世界大戦後の日本にとって極めて重要な政治家であった事実である。しかし、平和への貢献という点では、1951年の講和会議が取り上げられているだけであり、吉田の評価は必ずしも高くなかったといえるかもしれない。

それを裏付けるように、吉田はノーベル委員会における選考の最終段階では脱落していたのである。ノーベル委員会のヤーン委員長が残した日記によれば、1965年10月21日、委員会の会議でウ・タントが第1候補、UNICEFが第2候補となったが、ヤーンがウ・タントに反対した結果、授賞者はUNICEFに決まったとされる<sup>87)</sup>。

## (2) 選考結果発表後の日本外務省の動き

1965年10月下旬、ノーベル平和賞受賞者の発表を迎えた勝野大使は、受賞者について積極的な情報収集を行なっている。

勝野大使は、同年10月25日、リュング外相より「今年度受賞は国連の『UNICEF』関係

に決定せる旨内話したので、電話にて●●に確認した」と記し、1965年度の受賞者を本省に報告している<sup>88)</sup>。非開示の●●はノーベル委員会委員長あるいは委員あたりであろう。また、勝野は「菲才にて本使の努力効を奏せざりしことにつき、『佐藤』総理ほか、推薦者の方々に深くお詫び申し上げる」と謝罪している。さらに、「来年度についても、同様の方針の際は相当早目に手をうつこと必要と存ぜられる」とすぐに来年度に向けて意見具申をしているのである。

1965年のノーベル平和賞受賞者は、正式に10月25日、ノーベル委員会から発表されている。ノーベル委員会の徹底した秘密保持により、勝野大使は事前に受賞者名を入手することはできなかったが、外相から直接話を聞き、ノーベル委員会にもすぐに確認できたのは、勝野の地道な活動と人的関係の賜物であろう。工作活動が最終的にいかなる結果になったかは、他国から吉田を推す推薦状を調達した日本大使からも通知するよう、要望が出されていた。たとえば、10月22日、武内在アメリカ大使は、吉田氏に決まる、決まらないにかかわらず、受賞者名が公表される以前にアチソンに何等の内話をしたいので、「吉田氏の受賞如何に関し、政府に於かれて、何等かの情報を得られた場合には、当方にも速やかに御通報を得たい」と求めている<sup>89)</sup>。

勝野大使は、受賞者発表後、再びノーベル委員会委員に接触を試み、選考過程について情報を収集している。さらに、それに基づいた敗因の分析も行なっている。翌年以降の推薦工作にもつながる多くの論点が指摘されており、極めて重要なものであるため、詳細に分析したい。

10月29日、勝野大使は、選考の様態について忌憚なき意見を聴取するため、ノーベル委員会委員長ヤーンに会見を申込み中とするが、同委員長が病気でひきこもり中であり、いずれ先方の感触等確かめると本省に報告している<sup>90)</sup>。

11月6日、勝野大使は、推薦工作の状況と反省点、今後に向けて意見具申を本省に報告している<sup>91)</sup>。長文の電報であるが、極めて重要なものであるため、そのポイントを以下に整理しつつ、紹介する。

勝野大使は、11月4日●●（ノーベル委員会委員か）を往訪し、忌憚なき意見を求めている。まず本年度の日本候補の見込みがどのようなであったかを単刀直入に質問したところ、当惑した面持ちで申し上げられないと回答される。そのため、勝野大使は「日本候補としては、候補が元老である。推薦者も皆要職にあるので、全く見込みがない場合に、無駄な努力を続けることは、日本の名誉にかけて如何かと思われるので、重ねてお伺いしたいが、日本の候補には少くとも委員の関心を集めたであろうかと質したところ、●●は、日本の候補が LIMELIGHT を浴びたのは事実である。又地域的配分という点に注意が払われたことも事実であると述べた」と報告し、吉田が注目されたこと、地域的配分に注意が払われたことを指摘している。

さらに、勝野は、候補者が反共主義者であることに関連して、「委員会はソ連、中共等の思惑を気兼ねせられるやと伺ったところ、●●は、委員会としては出来得る限り UNIVERSAL の立場をとり、政治的な紛糾に巻き込まれない様苦慮していると語り、最後に●●としての意見を強いて述べよと言われるならば、JUST GO AHEAD とより申し上げようがない」とも報告している。

また、勝野大使は、別の委員会委員が大使を他用で訪問した際にも、吉田の見込みについて質問し、「●●も、自分が委員になったときは、既に内定しており、折角の御依頼に応じられなかったことは遺憾であったと述べたので、前記質問と同趣旨にて意見伺いたいと述べたところ、●●は、自分としては引続き立候補をお勧めすると答えた」と記している<sup>92)</sup>。

最後に、勝野大使は、来年度に向けて意見をまとめ、(A)から(F)までの6点を指摘する。

(A) 「日本が簡単に成功を収めることは勿論容易ではない」とした上で、「継続して努力することが適当であると存ずる」こと、

(B) 候補者の反共主義については、「候補者の反共主義は、多少委員会の心配の種となるべきは、争えないが、同時に地域的配分の考慮が有利に作用する点も見逃し難い」こと、

(C) 資料に関しては、「日本の資料は、日本語の HANDICAP もあり、比較的簡単、かつ、種類も少なかった点是否み難い。……継続立候補の場合には、改めて更に一工夫出来ないものかと思われる」こと、

(D) 委員会の構成については「本年は死亡、政変により、2人の委員の更迭があった。……例えば委員長が変れば、相当の影響があるであろう」こと、

(E) 推薦者については『アチソン』、『アデナウア』両氏の推薦があったが、『アデナウア』氏については、当国はドイツに占領されて、ドイツには気分的に強い反感がある。殊に途中で交代した●●<sup>93)</sup>の BUILDING は占領軍の G H Q になったりして、快く思っていなかったため、EVEN ADENAUER からも推薦があったと皮肉っていたので、推薦者の選択にも注意を要する」こと。

以上の分析の後、最後に(F)として勝野大使は「本使としては、成否は無論予測の限りではないが、密かに工作する以上、マイナスがないので、上記(C)の点に改めて工夫を凝した上で、継続立候補されては如何かと愚考する次第である」と本省に進言している。

勝野大使は、委員への接触を続けている。11月16日、勝野大使は、ノーベル委員会の委員と考えられる●●を往訪し、事故の見舞いを述べるとともに本年度御世話をかけたことに候補者、推薦者が謝意を表していることを伝えている<sup>94)</sup>。さらに、「来年度の見込みにつき是非ともそつ直なる御意見をうかがい度いとこん請したところ、同氏は本年度は誠に遺憾であったと謝した上、'QUITE CONFIDENTIALLY, THE JAPANESE CANDIDATE WAS ONLY ONE IN FAVOR AOMONG THE OTHERS' と打ち明けてくれた」と報告している。同委員が、候補者の中で吉田を支持したことを内密に教えてくれたことを本省に報告している。

この直後の11月18日にも、勝野大使は、ノーベル委員会委員長の見解として、「委員長は自分は本年度は『個人賞』にすべきであると考えたが、結局『団体賞』に決ったと述べていたのでお知らせする」と本省に報告している<sup>95)</sup>。委員長とは、ヤーンのことである。

11月19日にも、勝野大使はノーベル委員会委員と考えられる●●との話をもとに、推薦工作についての考えをまとめ、本省に報告している<sup>96)</sup>。これも長文ではあるが、重要であるため、その概要をみてみよう。

「1、本年2月頃本件につき初めて●●と会見したときは、●●は吉田氏のことについては全く知るところがなかった」と述べている。

「2、その後調査審議が進むにつれて戦後における日本の驚異的な平和的、経済的発展の支柱としての同氏の受賞適格性につき次第に認識を深めるに至ったと推察される。また他の委員については●●の言の如く、簡にして要を得たわが方追加資料が極めて有効であったと観察される（かつて●●は委員の中には候補者の伝記、著作などを読まずに会議に出て来るものがあるところぼしていた。）。3、他の候補者については、U THANT を除き遺憾ながら氏名が分らないが、いずれも種々の条件にピッタリはまる適格者がなかったものと推測される。4、委員会の中立主義的性格に関する本使の危惧は62年の LUCIUS C. PAULING、64年の MARTIN LUTHER KING 等の受賞者から出たものであるが、いささか思い過しであったと思われる。5、来年度は個人賞になることはまず間違いなかるべく、従って極めて有力な新顔が出ない限りわが方成功の公算は大であると判断し得る」と述べている。

以上のように、勝野は、吉田についての追加資料が極めて有効であったこと、ウ・タント国連事務総長なども候補であったが、種々の条件にピッタリはまる適格者がいなかったこと、ノーベル委員会の中立主義的性格についての勝野大使の危惧は思い過しであったことに触れている。さらに、来年度は個人賞になることはまず間違いなく、「従って極めて有力な新顔が出ない限りわが方成功の公算は大であると判断し得る」と述べ、吉田受賞の可能性が高いとの希望的観測を披露したのである。

受賞者発表後、精力的に情報収集をし、本省に意見具申したのは、勝野大使だけではなかった。アチソン元国務長官に推薦状を依頼した武内在アメリカ大使も、本省に対して頻繁に電報を出している。武内大使は、11月19日にアチソン元国務長官と会見するに当たり、本年度の吉田支持に対して「謝意を表する積りである」とし、さらに「本件努力は当然来年は早目に開始して継続されることと考えられるので、同氏に対して何れ改めて御依頼することと思われるがその節はよろしくと頼む旨述べておくこと然るべきかと思われる」と述べ、本省に指示を仰いでいる<sup>97)</sup>。

11月19日、武内大使は実際にアチソン元国務長官に面会している<sup>98)</sup>。武内は「アチソン氏訪問謝意を述べるとともに、本年も支援方依頼したところ、先方は快くこれを引受けたので今回はなるべく早めに御決定をお知らせ願いたい」と本省に報告している。武内は、アチソン元国務長官から1966年度の推薦についても早々に吉田支持を取り付けたのである。

こうして、1965年の推薦工作が終わった直後から、次年度も推薦を継続する方向で動き出したのである。

本省も早速ノーベル平和賞の細則を在ノルウェー大使館に求めており、12月1日、勝野大使は、とりあえず大使館保管のもの写しを空送すると回電している<sup>99)</sup>。その際、勝野大使は、提出資料について「来年度も本年度どおりの資料を提出されるほか、平和しよう細則第6条の主旨に添う有りよくな資料を加えられること然るべしと認められる」と助言している。12月14日には、

勝野大使は、ノーベル委員会に細則の変更点の有無を照会し、変更点なしの回答を得て、本省に報告している<sup>100)</sup>。

さらに、勝野大使は在ノルウェー大使を離任することになり<sup>101)</sup>、離任の挨拶に●●（ノーベル委員会委員長あるいは委員）を訪問し、その報告を12月22日に本省に伝えている<sup>102)</sup>。勝野大使は、「日本政府は来年も立候補する予定で準備を進めているので御援助をお願い」した後、さらに資料についての注文を聞き、「今年の資料はまことに COMPLETE であつたが、自分は特に候補者の現在の見解（PRESENT VIEWS）を知りたいと思つていると述べたので、かかる資料もしかるべく御準備ありたい」と本省に進言している。

勝野大使は、ノーベル委員会委員と考えられる人物に来年度も援助をお願いし、資料についても貴重な情報を得ている。特に、候補者の「現在の見解」に関する資料を求められた点は、その後の資料作りに影響を与えることになった。

勝野大使は、翌12月23日も本省にノーベル委員会委員と考えられる人物「●●の思想傾向の一たん極めて断ぺん的であるが何等御参考まで」として報告している<sup>103)</sup>。前日に報告した人物と同じ可能性もある。電報によれば、その人物は、「徹ていせる中共国連加盟論者」、「全てのさつ人に反対し、死けい廃止を主張」、「ヴェトナムにおけるアメリカの政策には批判的」、「解放戦争は正義の戦争であるのとの中共の主張には反対」、「日本のみが東アにおけるゆう一の成功した民主主義国家であるとしよう賛している」とする内容であった。

## おわりに

以上のように、1965年に外務省は吉田元首相のノーベル平和賞受賞を目指し、活発な推薦工作を行なったのである。これまで明らかにならなかった推薦工作の実態が徐々に浮かび上がってきた。

すなわち、外務省は事務次官以下、一丸となって国内外で精力的に情報収集活動を展開し、さらに外国の有力者から推薦状を得ようと熱心な働きかけも行なった。活動はアメリカ、イギリス、西ドイツ、スウェーデンなど広範囲にわたり、実際にアメリカのアチソン元国務長官、西ドイツのアデナウアー元首相から推薦状を得ている。さらに、ノルウェーにおいて、勝野在ノルウェー大使がノーベル委員会委員に個別に接触し、情報を収集するとともに、吉田を売り込んでいる。1965年ノーベル平和賞選考の最終段階である同年10月に勝野大使がいかに精力的にノーベル委員会委員に接触したかは、上述の通りである。1965年は、ノーベル委員会委員のうち2名の委員が途中で交代したため（1名は死亡、もう1名は閣僚就任）、勝野大使の工作活動は困難を極めたであろう。勝野大使の要望により、本省が用意した追加資料の配布もあり、吉田が候補となっていること、第二次世界大戦後に吉田が日本やアジアの平和に大きな役割を果たしたことはノルウェー側に十分伝わったと考えられる。勝野大使の感触では、吉田を支持する委員もいたとされ

る。

ノーベル委員会の開示した1965年の選考史料によれば、吉田は、同年の31候補中、報告書が作成された12候補の中に入っている。これは、いわゆるショートリストの段階まで吉田が進んでいたことを示す。その意味では、勝野大使らの工作活動も一定の効果を有したのかもしれない。しかし、その工作もむなしく最終的には同年の受賞者はUNICEFとなった。

勝野大使は受賞者発表後も精力的にノーベル委員会委員に接触を試みている。委員からは候補としての吉田について悪い感触は受けず、翌1966年の選考に対して再応募することすら進言されている。そのため、勝野大使は工作活動の反省点を記すとともに、再応募を求める意見具申を本省に上げている。これが本省にも受け入れられ、吉田をめぐる推薦工作は2年目に突入することになった。1965年の推薦工作で勝野大使が果たした役割は、極めて大きなものがあったといえよう。

また、本省では黄田事務次官、その後任の下田事務次官の存在が大きかったと考えられる。事務次官は、1965年の吉田推薦に関するすべての公電に目を通していている。公電の配布先を見る限り、この件は基本的に事務次官ら少数の関係者で処理されていた。そのため、外部に漏れることもなく、秘密裏に進めることができたのである。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

#### 註

- 1) たとえば、『吉田茂氏に平和賞』政府一体で推薦工作『毎日新聞』2014年9月13日夕刊。「ノーベル平和賞へ政府工作、吉田元首相推薦状を発見」『東京新聞』同年9月13日夕刊。「『ノーベル平和賞に吉田元首相を』、佐藤栄作首相ら推薦状」『産経新聞』同年9月14日。
- 2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補——」（『地域政策研究（高崎経済大学）』第17巻第2号、2014年11月）、13～20頁。
- 3) 外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』第2巻。
- 4) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補——」、14～15頁。
- 5) 「ノーベル平和賞候補に吉田茂氏を推薦、小泉信三氏らが手続き」『東京新聞』1966年2月2日朝刊。「吉田元首相を推薦、ノーベル平和賞候補に」『読売新聞』1966年2月2日夕刊。なお、これらの記事は2015年2月に開示された外務省史料にも収録されている。
- 6) 筆者の調査によれば、第二次世界大戦前から日本人候補は存在していた。吉田より前の候補としては、1909年の有賀長雄（国際法学者）、1926年、1927年の洪沢栄一（実業家）、1954年、1955年、1956年、1960年の賀川豊彦（社会事業家、牧師、作家）、1960年の岸信介（首相）、1963年の鈴木大拙（仏教哲学者）がいる。そのため、吉田は日本人として6人目の候補ということになる。
- 7) 御巫清尚「晩年の吉田茂氏」（財団法人吉田茂記念事業財団編『人間 吉田茂』中央公論社、1991年）、590～591頁。御巫清尚（1921～1998年）は、1963年に吉田の世話係になった後も、外務省のアジア局賠償部調整課長、経済協力局国際協力課長、同政策課長を兼務しており、1967年夏に世話係を後任に引き継いだ。吉田が急逝し、国葬まで手伝うことになった。吉田の晩年の約4年間、吉田の傍にいた。その後、御巫は、経済協力局長、在フィリピン大使、在カナダ大使、在韓国大使を歴任し、1987年に退官している。
- 8) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補——」、15～16頁。
- 9) 「三月始めに」とあるが、ノーベル平和賞の締切は「2月1日」であり、実際はこれよりも早くに起草依頼があったと考えられる。
- 10) 内海丁三（1897～1973年）は、大阪朝日新聞の記者の後、第二次世界大戦後は時事新報の論説委員、編集局長、主幹を歴任。また、駒澤大学教授、産業経済新聞の論説委員、NHK解説委員も務めた。1973年3月に死去した際、佐藤栄作元首相が告別式に参列したとの記録もあり（伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第5巻、朝日新聞社、1997年、314頁）、佐藤ら政治家とも縁が深かったことがわかる。
- 11) 高坂がこの件のゴーストライターであったことは、以下にも指摘がある。中西寛『『宰相吉田茂』の魅力』（高坂正堯『宰

## 吉 武 信 彦

- 相 吉田茂』中央公論新社、2006年)、10～11頁。
- 12) Shigeru Yoshida, "Japan's Decisive Century," *Britannica Book of the Year 1967* (Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 1967), pp.17-48. 邦訳は以下の通り。吉田茂『日本を決定した百年』(日本経済新聞社、1967年)。
  - 13) 御巫は、新任の在ノルウェー日本大使を「勝野康助大使」としているが、「須山達夫大使」の誤りと考えられる。勝野は、1962年～1966年に在ノルウェー日本大使を務めた。後任の須山は、1966年～1969年に同大使を務めた。
  - 14) 吉田の推薦活動が展開された1965年から1967年までの外務省事務次官は、以下の通りである。黄田多喜夫(任期1964年5月15日～1965年6月29日)、下田武三(任期1965年6月29日～1967年4月14日)、牛場信彦(任期1967年4月14日～1970年7月10日)。3人の中で、推薦活動と最も長く時期の重なる下田武三は吉田の推薦で中心的役割を演じたと考えられる。なお、下田武三の回想録に吉田のノーベル平和賞推薦についての言及はない。下田武三、永野信利『戦後日本外交の証言——日本はこうして再生した——』上・下(行政問題研究所、1984、1985年)。人事情報については、以下を参照した。秦郁彦編『日本官僚制総合事典 1868-2000』(東京大学出版会、2001年)。
  - 15) 保阪正康『吉田茂という逆説』(中央公論新社、2000年)、434～436頁。
  - 16) 外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』第2巻。
  - 17) Letter from Eisaku Sato, Etsusaburo Shiina, Kisaburo Yokota and Shigeru Kuriyama to President of the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 26 January 1965.
  - 18) Shigeru Yoshida, Biographical Notes.
  - 19) Reasons for Recommendation.
  - 20) Gunnar Jahn: Speech in the Oslo University Festival Hall, on the Occasion of the Presentation of the 1964 Nobel Peace Prize.
  - 21) Eighth Plenary Session, Opera House, 8. p.m., September 7, 1951.
  - 22) 全体の表題なし。4部構成の各章表題は以下の通り。1. Shigeru Yoshida, the Man, His Passion for Peace. 2. Peace Constitution and Shigeru Yoshida—He Mapped Out the Route for New Japan—. 3. Rearmament of Japan and Shigeru Yoshida—He Chose the Security Treaty between Japan and the United States of America—. 4. Post Economic Rehabilitation and Shigeru Yoshida—He Lead the Foundation for Japan's Economic Reconstruction—.
  - 23) 前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：1960年代前半の日本人候補——」、17～18頁。
  - 24) 同上、18～19頁。
  - 25) 「衆議院議員鈴木宗男君提出外務省の館長符号に関する質問に対する答弁書」(内閣衆質164第191号、平成18年4月7日)。「衆議院議員鈴木宗男君提出外務省文書の秘密指定区分に関する質問に対する答弁書」(内閣衆質163第15号、平成17年10月21日)。
  - 26) 「館長符号 極秘 TA 3051、65年1月29日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。本省宛での公電は基本的に外務大臣宛であるが、本省内での実際の配布先は公電により異なる。1965年の吉田推薦については、事務的なものは事務次官まで、政治的に重要性の高いものは大臣まで配布されている。以下、大臣まで配布された公電には「大臣まで配布」と記す。特に明記がない公電は、事務次官まで配布されたものである。
  - 27) 「極秘 4部ノ内4号 吉田茂氏のノーベル平和賞受賞のため現在までに行ったこと 昭40.4.27 欧西(川口)」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 28) Letter from Eisaku Sato, Etsusaburo Shiina, Kisaburo Yokota and Shigeru Kuriyama to President of the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 26 January 1965, PFL 71/1965 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965.
  - 29) Shigeru Yoshida, Biographical Notes and Reasons for Recommendation, PFL 71/1965 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965.
  - 30) 「館長符号 極秘 総番号14130、65年4月30日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 31) 「極秘 4部ノ内4号 吉田茂氏のノーベル平和賞受賞のため現在までに行ったこと 昭40.4.27 欧西(川口)」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 32) 1. Shigeru Yoshida, the Man, His Passion for Peace. 2. Peace Constitution and Shigeru Yoshida—He Mapped Out the Route for New Japan—. 3. Rearmament of Japan and Shigeru Yoshida—He Chose the Security Treaty between Japan and the United States of America—. 4. Post Economic Rehabilitation and Shigeru Yoshida—He Lead the Foundation for Japan's Economic Reconstruction—, in Bilag til Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965 (U-Y). なお、同文書全体を示す題は記されていない。
  - 33) 吉田茂『大磯随想』(雪華社、1962年)。日本語本文の部分が95頁、英文部分が50頁である。
  - 34) Shigeru Yoshida, *The Yoshida Memoirs: The Story of Japan in Crisis*, translated by Kenichi Yoshida (Boston/Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin Company/The Riverside Press, 1962). 原著は、吉田茂『回想十年』全4巻(新潮社、1957～1958年)。
  - 35) 「館長符号 極秘 TA 5103、65年2月17日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 36) 「館長符号 極秘 TA 5397、65年2月19日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦の件」(日本外務

## ノーベル賞の国際政治学

- 省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 37) 「館長符号 極秘 TA 6207、65年2月26日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞受賞推薦について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 38) 「館長符号 極秘 総番号5534、65年2月20日、在ストックホルム鶴岡大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 39) 「館長符号 極秘 TA 6248、65年2月26日、在ストックホルム鶴岡大使発外務大臣宛、吉田元総理のノーベル平和賞受賞推薦について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 40) 「極秘 TA 10514、65年4月2日、在ボン成田大使発外務大臣宛、吉田元首相のノーベル平和賞受賞推薦状について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 41) 「館長符号 極秘 総番号13426、65年4月24日、在ボン兼松代理大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。吉田関連の資料は、ノーベル委員会に提出された推薦状と付属書類と考えられる。
  - 42) 「館長符号 極秘 総番号14422、65年5月3日、在ボン兼松代理大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 43) 「館長符号 極秘 総番号17526、65年5月27日、在ボン内田大使発外務大臣宛、アデナウアー首相との会談の際のノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 44) Letter from Konrad Adenauer to President of the Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 28 April 1965, Ad PFL 71/1965 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965.
  - 45) 「極秘 4部ノ内4号 吉田茂氏のノーベル平和賞受賞のため現在までに行なったこと 昭40.4.27 欧西(川口)」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 46) 「館長符号 極秘 TA 13972、65年4月28日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 47) 「館長符号 極秘 TA 17736、65年5月28日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 48) 「館長符号 極秘 TA 18418、65年6月3日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 49) 「館長符号 極秘 TA 20364、65年6月17日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 50) Letter from Dean Acheson to Gunnar Jahn, President, Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 14 June 1965, PFL 71/1965 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965.
  - 51) 「極秘 4部ノ内4号 吉田茂氏のノーベル平和賞受賞のため現在までに行なったこと 昭40.4.27 欧西(川口)」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 52) 「館長符号 極秘 TA 18364、65年6月3日、在ロンドン島大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 53) 「館長符号 来電総第18918号、昭和40年6月8日、在ロンドン島大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 54) 「館長符号 極秘 TA 20083、65年6月16日、在ロンドン島大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
  - 55) 「42.1.10 欧西 原推薦者及び推薦者リスト」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 56) 「極秘 4部ノ内4号 吉田茂氏のノーベル平和賞受賞のため現在までに行なったこと 昭40.4.27 欧西(川口)」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 57) 手書きメモ(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。日付、署名など一切ないが、ファイルにとじられた位置、内容から1965年4月頃の史料と判断される。
  - 58) 「42.1.10 欧西 原推薦者及び推薦者リスト」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 59) 「館長符号 極秘 TA 3063、65年1月29日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補者について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。なお、「DOLOI」は「DOLCI」の誤りである。
  - 60) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1965* (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1965), s. 8, 11.
  - 61) 「館長符号 極秘 TA 5103、65年2月17日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 62) 「館長符号 極秘 TA 5397、65年2月19日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推薦の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。「館長符号 極秘 TA 6207、65年2月26日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞受賞推薦について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 63) 「館長符号 極秘 TA 6583、65年3月2日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞候補推せんについて」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
  - 64) 「館長符号 極秘 総番号14130、65年4月30日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外

吉 武 信 彦

- 務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 65) 「館長符号 極秘 総番号29937、65年9月1日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 66) 「館長符号 来電総第33619号、昭和40年9月29日、在オスロー勝野大使発福田大臣代理宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 67) 「館長符号 極秘 総番号33970、65年10月1日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 68) 「館長符号 極秘 総番号34273、65年10月4日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 69) 「館長符号 極秘 総番号34569、65年10月6日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 70) 「館長符号 極秘 総番号35874、65年10月15日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 71) 「館長符号 極秘 総番号36123、65年10月18日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 72) 「館長符号 極秘 総番号36612、65年10月22日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 73) 「館長符号 極秘 総番号34685、65年10月6日、在国連松井大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 74) 「館長符号 来電総第33619号、昭和40年9月29日、在オスロー勝野大使発福田大臣代理宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 75) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1965*, s. 7-11.
- 76) *Ibid.*, s. 5.
- 77) ノルウェー大事典<[https://snl.no/Preben\\_Munthe](https://snl.no/Preben_Munthe)>、ノルウェー人名事典<[https://nbl.snl.no/Preben\\_Munthe](https://nbl.snl.no/Preben_Munthe)>。
- 78) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1965*, s. 56.
- 79) *Ibid.*, s. 56-57.
- 80) *Ibid.*, s. 56-57. ヤングの著作の正確な書誌データは、以下の通り。A. Morgan Young, *Imperial Japan, 1926-1938* (London: G. Allen & Unwin, 1938).
- 81) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1965*, s. 57-59.
- 82) *Ibid.*, s. 58-59.
- 83) *Ibid.*, s. 59-62.
- 84) Shigeru Yoshida, "Japan and the Crisis in Asia," *Foreign Affairs*, January 1951 <<https://www.foreignaffairs.com/articles/japan/1951-01-01/japan-and-crisis-asia>>, p.16. 吉田茂「来るべき対日講和条約について」(フォーリン・アフェアーズ・ジャパン編・監訳『フォーリン・アフェアーズ傑作選 1922-1999 アメリカとアジアの出会い』上、朝日新聞社)、260頁。
- 85) Shigeru Yoshida, *The Yoshida Memoirs: The Story of Japan in Crisis*, pp.107-108.
- 86) Letter from Dean Acheson to Gunnar Jahn, President, Nobel Committee of the Norwegian Parliament, dated 14 June 1965, PFL 71/1965 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1965.
- 87) Fredrik S. Heffermehl, *The Nobel Peace Prize: What Nobel Really Wanted* (Santa Barbara, California: Praeger, 2010), pp.209-210.
- 88) 「館長符号 大至急 来電総第37059号、昭和40年10月25日、在オスロー勝野大使発権名大臣宛、ノーベル平和賞に関する件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 89) 「館長符号 来電総第36826号、昭和40年10月22日、在ワシントン武内大使発権名大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 90) 「館長符号 極秘 総番号37660、65年10月29日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 91) 「館長符号 来電総第38815号、昭和40年11月6日、在オスロー勝野大使発権名大臣宛、ノーベル平和賞に関する件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 92) このノーベル委員会委員は、授賞者が内定していた選考最終段階に委員になったと考えられ、該当するのはリュング外相の後任であるヴィクボルグ委員ではないかと考えられる。
- 93) 非開示の委員は、外相に就任するため委員を交代したリュングと考えられる。外務省の建物には、第二次世界大戦中、ドイツ軍の司令部が置かれた。
- 94) 「館長符号 極秘 総番号40015、65年11月16日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 95) 「館長符号 極秘 総番号40369、65年11月18日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 96) 「館長符号 極秘 総番号40519、65年11月19日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外

## ノーベル賞の国際政治学

務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。

- 97) 「館長符号 極秘 総番号40266、65年11月17日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。以下も同様の内容である。「館長符号 極秘 総番号37583、65年10月28日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞の件」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。2通とも大臣まで配布。
- 98) 「館長符号 極秘 総番号40625、65年11月19日、在ワシントン武内大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。大臣まで配布。
- 99) 「館長符号 極秘 総番号42040、65年12月1日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 100) 「館長符号 極秘 総番号43808、65年12月14日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 101) 勝野大使は、1962年9月30日に在ノルウェー特命全権大使となり、1966年1月12日に臨時代理大使・参事官の福田貴に引き継いでいる。1966年2月28日には、須山達夫が特命全権大使となり、1969年1月まで務めている。「主要在外公館長一覧」(外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版 日本外交史辞典』山川出版社、1992年)、127頁。
- 102) 「館長符号 極秘 総番号45016、65年12月22日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。
- 103) 「館長符号 極秘 総番号45186、65年12月23日、在オスロー勝野大使発外務大臣宛、ノーベル平和賞について」(日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件第2巻』)。

### 付記

本年度をもって定年退職される河辺俊雄先生には、これまでのご指導に対して心よりお礼申し上げます。ご研究のますますの発展とご健勝を祈念いたします。

ノルウェー・ノーベル研究所での調査では、多くの研究所スタッフに大変お世話になりました。ドイツ語史料に関しては、本学の三瓶憲彦名誉教授に貴重なご助言を頂きました。ここにお名前を記し、心よりお礼申し上げます。